



農業の価値を再定義 秋田の農産物を 全国、世界へ

「リンゴの神様」の異名を持つ保坂さん。

このままでは廃れてしまうという危機感。
秋田の農業の未来に、自分たちが貢献できることを模索



山瀬青果 株式会社

秋田市公設地方卸売市場に本社を置く山瀬青果株式会社。卸売市場の開設とともに創業し、昨年創立50年を迎えた。創業当初は地域の農産物を仕入れ、効率的に取引先へ届けることを使命としていたが、時を経て全国の農産物を広く取り扱うようになった。現在は、レベルの高い秋田の農産物の認知度を高めるため、自社のオリジナルブランドを立ち上げるなど精力的な取組を行っている。常務取締役の橋本一昭さんにお話を伺った。

はしもと かずあき
常務取締役 橋本 一昭

〒010-0802
秋田市外旭川字待合28
TEL 018-869-5188
FAX 018-869-5190
<https://yamase-seika.com/>



50年続けることができたのは 品質にこだわる農家のおかげ

昭和49年に創業した山瀬青果株式会社。取扱品目のうち、全体の3割を野菜、7割を果物が占めている。県内産の農産物は東京や北海道、新潟や関西、九州などの市場へ出荷しており、市場間では秋田の作物に対する評価は高いそうだが、物量が少ないことで一般の消費者からの認知度が上がらないという問題がある。

橋本さんは「10年ほど前から、秋田の農業の未来に危機感を抱いていました。そのような中で、私たちが事業を続けることができたのは、農家の方々が良いものを作り続けてくださったから。これまで支えてくれた方々への恩返しの意味も込めて、秋田の農業の未来に貢献したい。そのために自分たちができることは何か社内で協議を進めてきました」と振り返る。



社員による果実の梱包作業。
県内外問わずたくさんの果物が運ばれてくる。

より持続可能で 生産者が誇りを持てる農業を

山瀬青果の従業員は現在24名。創業から果物を多く取り扱ってきたこともあり、果物の目利きができるスター社員が多いのが自慢だ。それぞれが農家と密に情報交換を行い、秋田の農業に対する思いも強い。彼らが掲げたこの先50年に向けた新たな指針は「生産者が誇りを持てる農業」。農業をより持続可能で社会的



割ると蜜が放射状に広がるその姿は、まさに花火のようだ。

に評価される職業へ進化させる取組を始める決意をした。

時を同じくして果実部長の保坂隆さんは秋田県が開発した品種「秋田19号」に目を付ける。外観が悪く小ぶり、誰もが販売に適さないと評価した品種だ。ただ割ってみると蜜が放射状に広がるという特異性を持ち、驚くほど甘くて香りが高い。先に定めた指針に基づき「このギャップこそ新しい価値だ。これを独自に評価できる会社になりたい」という思いから、自社でブランディングを進めた。

ギャップが魅力の「金蜜花火」 農業を憧れの職業に育てたい

「秋田19号」の特徴である蜜の広がりを花火に見立て「金蜜花火」と名付け、多くの人々の協力を得て令和2年にデビュー。独自の選別基準をクリア

したもののみ、その名前で販売を開始した。毎年12月の発売時には、数日で売り切れるほどの人気ぶりだ。県内はもちろん、全国の消費者から注文が入り、昨年開始したEC販売では、1箱8個入りの商品を100箱用意したところ、30分で完売したという。

「昨年11月に開催した生産者への説明会では、前年の10倍ほどの人が参加してくれました。将来的な目標としては、ニッポンのブランドとして世界に認知されること。そして何よりも農家が金蜜花火を作っていることに誇りを持てるようになればと思います。未来を担う方々が農業ってカッコいいな、やってみたいなと、憧れるような職業にしていきたいです。」

農家にリスペクトを抱き、プライドを持って商品を販売する。山瀬青果が掲げる新たな指針は、秋田の農業の未来を変えていくことだろう。



活性化センターのDX導入支援を受け、紙ベースだった受注をデジタル化するオリジナルシステムを開発した。現場で入力されたデータは経理が確認。「ヒューマンエラーが激減し、効率が良くなりました」と橋本さん。

